

親友へ

ラジオネーム：濃厚な梅干し

「遅くなってごめんな。」って、君には何回言っただろう。この手紙でも謝らなきゃ。「また遅くなってごめんな。」

葬儀のときに、君の家族から預かった手紙。「これ、読んであげて」って言われていたけど、なかなか読めずずっと机の引き出しにしまった。何回か「読もう」「今日こそは読もう」と引き出しから取り出してみた・・・が、今度は封を開ける勇気が出ず、また引き出しにしまうの繰り返しで、気が付けば3年。子どもたちも大きくなっていたよ。

年末。君の夢を見たんだ。どんな夢だったのか、細かく思い出せないけど、君が夢に出てきてくれたこと、そして「手紙読んだっ。」の一言はしっかりと記憶にある。朝起きて、ハッとした僕は、思い出の公園に向かったんだ。君と遊んでいたのは、だいぶ前だもんなあ。思い出の滑り台はなくな、寂しく思っていたら、道路わきにあるベンチだけは当時のままだった。腰かけ、勇気をもって封を開けると、野線からはみ出るくらい大きい文字が。変わってないな。

担任の先生に「もう少し字は小さく丁寧に書きましょう」「なんて怒られたこともあったよな。」でも少し老眼になってきた僕にと

っでは、これくらいが心地よかった。

手紙には、

「だぶん、この手紙を読むのはしばらく経ってからのことだと思う。一歩踏み出すのに勇気が出ないやつだから」と。なんでわかったんだ？

確かに、この手紙を読むのにも3年かかったし、君との待ち合わせも毎回遅れ、仕事だって、家族のことだって……性格がゆえに遠回りしたこともあったんだよな。

君はつひつひ

「でも、一歩踏み出しさえすれば、出来るやつだから。これからせ勇気をもって頑張っつべね」

おーい、見ているか？ 遅くなったが、手紙しっかり読んだぞ。

そつていつか、俺もそつちに行く。待ってっつべねよな……

そのときにも言おう、「遅くなつてごめん」と。君の分までとは言えないが、もう少しこつちで頑張つてみたいと思う。